

第4回石川県長期構想策定検討会議 議事録

日時 平成28年2月3日(水) 13:30~15:00

場所 石川県行政庁舎 第1105会議室

(澁谷委員)

大変素晴らしい最終案ができあがったと感激しておりますが、28ページをご覧くださいいただけますか。施策3「次世代産業の創造」ですが、実は先月、NHKの「クローズアップ現代」に出ていたのですが、樹木の繊維で「セルロースナノファイバー」という素材が仮に工業化されてできあがると、鉄の5倍の強さがあって、炭素繊維よりも強度があって、そして軽量という素材ができる可能性があるというので、どこかの大学の先生がやっているのを見ました。今、これは10年の目標ですから、3年か5年経過すると、ひょっとするとそういう新素材が現れてくる可能性がありますので、何かここに1から2行、ちょっと足していただけたらどうかなと思っています。

(藤崎企画振興部長)

今いただいたご意見を踏まえて、書きぶりについては事務局で検討させていただきたいと思います。

(加藤敏彦委員)

私は、バス協会の関係で出させていただいておりますので、交通や道路などの観点から気が付いたことを二つほど申し上げます。まず資料12ページ、「ダブルラダー輝きの美知」構想の推進ということで、直接関係ない細かいことで恐縮なのですが、ページの左下に能登から金沢へのアクセスの時間距離が書いてあります。現在8割ぐらいの方が1時間半圏内で、将来的に10年後には9割の方が金沢に来られるという設定になっているかと思います。8割というのは、これは人口のことだと思います。今朝も国勢調査の結果が出ていましたが、能登の人口が21万人ぐらい。1時間半ではちょっと届かないなというのが多分、珠洲、輪島、能登町辺りで、合わせると約6万人の人口だと思います。単純計算でいきますと、現在3割ぐらいが1時間半に届かないのではないかと思いますので、もう一度この数字の検証をして、正しい数字に置き直していただきたいと思います。

関連して、細かい資料で申し分けありませんが73ページの右上の表の一番下に、今申しあげました能登から金沢への時間距離、それからもう一つ、輪島から名古屋への時間距離は現在が250分となっていますが、別の会議でも申しあげたことがあるのですが、正直申しあげて輪島から名古屋まで4時間10分で走るというのは、かなり至難の業では

ないかと思しますので、もう一度きちんと検証していただけたらと思います。

それから2点目は24ページ、(4)「豊かな暮らしを支える快適なみちづくり」のところ、自動車、歩行者の交通環境を整備しましょうということですが、やはり道づくりの中で一番大事なのは、安全・安心な道づくりといえるのではないかと思いますので、それを盛り込んだ方がいいのかなという感じがいたします。ただ、40ページのところに安全・安心な交通環境の整備ということが重複して記載してありますので、あえてここに書く必要はないのかもしれませんが、安全・安心というのが道づくりの一番大事なところではないかと思ひます。

それから、この順番も①から④と、普通ですと①が一番大事なのかなと見えるので、自動車がスムーズに走られることが最初というのはいかがなものかと。やはり、歩行者、自転車、身障者の方の快適な道づくりの方が優先順位として高いのではないかと、この2点に気が付きましたので、申し上げさせていただきました。

(常田土木部長)

まず時間のことですが、標準的に計算した値を記載しています。人口についても、将来人口を加味した上で、平成37年にはこれぐらいは期待したいという数字を掲げていますが、数字については再度精査したいと思っています。

(眞鍋委員)

1回目の会議のときに、若い人の意見もぜひお聞きして、この構想を作っていただきたいとお願いしたのですが、今日は参考資料の方で若手社会人、学生からの意見ということで出ていました。お聞きいただいて、まずはありがとうございました。

その中で私は、質問というよりお願いになると思うのですが、重点戦略3と重点戦略9に関わるお願いです。重点戦略3は、主に大学生の県内定着、Uターンを目標にしている戦略になるかと思ひます。重点戦略9の方は、もう少し下の小・中・高までの教育の戦略になるかと思ひますが、私は大学教員と、石川県の教育委員をさせていただいて、どうも高校と大学の接続のところがあまりうまくいっていないのではないかと感じる人が多いです。

それは、能登の高校に昨年、出張講義に行ったときにも、高校2年生は2040年に40歳になるそうですが、3人の生徒に「40歳のときにどこに住んでいるか」と聞いたら、3人とも「県外に住んでいる」と答えました。小・中で、テキストも作ってふるさと教育に力を入れているのは存じ上げていますので、高校生になったところで、石川県への愛着心であったり、故郷愛・郷土愛を醸成するような教育が繋がっていないのではないかという思いを持ちました。

大学に入って、高校から大学への接続、大学が高校にできることもあるかもしれないなど今思っているのですが、小・中・高と故郷愛・郷土愛を醸成して、もし一度、石川県を出た大学生であっても、石川県に戻ってきてほしいという重点戦略3につなげる。あるいは、優秀な人材がずっと石川県で学び、就職するという今回の戦略につなげるためにも、小・中・高、それから大学へつながった形で、重点戦略3と9を結びつけるようなところも少し考えて力を入れていただきたいというお願いです。

(木下教育長)

確かに、ややもすれば高校教育の現場の中での教育になっていたという反省もございまして、ここ近年ですが、一つは社会とつながる学習をしっかりしていきたいという思いがございまして。社会とつながるといふ中には、県内のさまざまな企業の実態、あるいはそこに働いていらっしゃる方々から、さまざまなものを学ぶような授業の形を取り入れていきたいと思っておりますし、地域にお住まいの方々、地域の素晴らしさを学んでいただくという意味での地域とのつながりをしっかりとつくってきたいと思っております。ふるさとの良さ、ふるさと企業の良さを学ぶことによって、大学を卒業した後で地域に対する思いも醸成されてくるのではないかと考えていますので、その点、今後われわれもしっかり取り組んでいきたいと思っております。

(馬場先委員)

この施策については、具体的に施策になったものを見ていかないといけないということはあると思いますが、この長期構想が出されると、いわゆる文字になって、外に出るわけですが、その中でちょっと1件気にかかるものがあります。といいますのは、重点戦略の7と8の中で、文字で「子供」「障害」というのがあります。近年、子どもの「と」は平仮名で書く傾向が強まっています、「子ども」が全部平仮名になっています。ただし、障害の「害」を平仮名で「がい」というのも、世間では使われつつあるような状態です。

私、石川県のホームページで、両方ともどのように使われているかを調べさせていただいたところ、漢字も平仮名もどちらもあったのですが、とくに「障害」の方では、窓口になるような「障害〇〇課」などは全て漢字です。平仮名で書いてあるのは、一部の障害をお持ちの方のような柔らかい表記の場合のみ、「障がい」と書いてあるのですが、「子ども」の場合はほとんどが平仮名で、ときどき漢字のものがあったという状況です。

全国的な自治体では、どういうものか、ほんの少しですが調べてみましたら、自治体の中では「障害」も平仮名で書くところも増えているというのも目にしています。そうした中で、一般の方にこれが出ていくという中で、県の方ではどのような方針で表

記するのかということで、ある程度の統一を考えてみられたらどうかと。特に、「子ども」と柔らかく書いてある中で「障害」という字がちょっと目に止まったものですから。漢字で書くのも一つの方法ではあると思うのですが、そのあたりの姿勢を、後に聞かれた場合の方針を定めておいた方がいいのかなと感じました。

(藤崎企画振興部長)

表記の方法については、また部内で検討しまして整理させていただきたいと思います。

(小田委員)

観光客の入り込みは県内主要観光地において軒並み増加しておりますし、温泉地では前年比約 120%という数字が上がっております。それから、先ほどございました長期構想に掲げている観光入り込み客数も 2500 万人をおおむね達成の見込みでございますし、新たな年を迎えた今も持続しております、北陸新幹線開業効果が県内全域に波及しているところです。開業 2 年目を迎える今年、飛躍的に発展した石川の観光の真価が問われる大事な年です。この開業効果の持続・発展、波及効果の拡大に向け、しっかりと取り組んでいかなければならないというのが現時点の感想です。

そのために、新たな長期構想の施策にも位置付けられている、石川の誇る歴史、文化、伝統工芸、芸能などの魅力に一層磨きをかけるとともに、お越しいただいた観光客の皆さまにご満足いただけるよういま一度、まさにこの点かと思いますが、おもてなしの原点に立ち返って、石川ファンの拡大、すなわちリピーターになっていただくような取り組みを重点的にやっていかなければならない 10 年になるのではないかと思います。本来の目的ではございませんが、おもてなしをより効果的にするために、サービス業におけるロボット技術の導入等の政策も大切になっていくのかなと思います。

それから、もう 1 点。人口減少の時代にあり、交流人口の拡大というのは地域の活性化を図る上で大事な視点でございます。そういう点では、今、取り沙汰されているインバウンド、これが 2000 万人に手が届く状況になっています。これをいかに一刻も早く 3000 万人まで高めるかということが、国家の問題点としても取り上げられているところです。この訪日外国人客を地域に呼び込み、地域の活性化を図る起爆剤として活用するために、観光業界においても行政としっかりと連携させていただいて、今後 10 年を見据えた新たな長期構想の実現に向けて、業界が力を合わせて着実に取り組んでいかなければならないと考えます。

(高山委員)

非常に網羅的に重点戦略 1 から 9 としてきちんと示してありますので、特にこれとい

うことはないのですが、少し気になったのは重点戦略6です。石川県は南北に細長い県土という特徴を持っていますので、施策1に書いてあるような県土づくりというのは非常に重要なことだろうと思います。特に、災害時などにおいて、ダブルラダーというのがリダンダンシーを確保するという意味でも非常に重要ですので、ダブルラダー構想に基づく確実な道路整備は今後も進めていくことが必要であり、重要なことだろうと思います。

それから、最初の方にご意見のあった所要時間の件ですが、特に気になるのは、救急搬送についてです。やはり能登の端から、例えば三次救急医療の拠点病院までの所要時間を考えたときに、七尾にある公立能登総合病院への搬送でも1時間ちょっとかかってしまいます。県立中央病院まで運ぼうとすると、さらに時間がかかってしまうという現実があります。よって、どうしても時間的な制約があるわけで、できればドクターヘリ、ドクターカーの整備というものをもう少し具体的に検討いただければと思っています。全国的に見ても、最近では整備されていない県は少なくなっているかなと思います。隣の富山県でも昨年からは配備されたと同様ですので、石川県にもドクターヘリを配備すれば、富山、石川両県のドクターヘリの点検整備のときの補完という点からもいいのではないかと考えています。

(高本健康福祉部長)

特に、能登北部地域の救急搬送については、地元自治体のご要望なども踏まえて現在、消防防災ヘリを活用した医療機関間の搬送などを行っておりまして、こうした取組み状況も踏まえて今後検討してまいりたいと考えています。また、主要な基幹病院には、いわゆる救急車による搬送、ドクターカーというものも配備されていますので、その利用状況も踏まえて、今後の在り方を検討してまいりたいと考えています。

(藤多委員)

石川県婦人団体協議会の会長をしています。重点戦略8「みんなで支えるやすらぎと絆の社会づくり」の男女共同参画社会の実現の中に、「男女共同参画を推進するための拠点として女性センターの充実を図ります」というところがあるのですが、この女性センターに対して、今の女性センターではちょっと古いイメージが先に立ってしまいますので、男女共同参画社会に向けた新しい名称など、もうちょっと皆さんが「あら素敵だね。行ってみよう」と親しみを持つような名称を付けていただけたらと思います。

(森田県民文化局長)

女性センターに親しみやすい名称をとということですが、今後、女性団体の皆さんのご

意見を聞きながら検討させていただきたいと思います。ただ、センターの利用促進という面では、いろいろな講座の開催、助成制度等工夫しながらセンターの活性化を図っている次第です。

(深山委員)

石川県商工会議所連合会会頭でございます。長期構想の策定の検討会議というのは昨年6月19日に第1回が行われまして、2回目、3回目ということで各代表者の方々が出席されてご意見をおっしゃっていただき、調整、反映されながら、今回最終案がまとまったということです。昨日は、今までの流れを一生懸命1回目からのものを見ておりまして、そしてこの最終案を見ながら理解しているところです。

私は、経済界というような立場で大げさなことは言えませんが、今の大きな現象というのは、人口減少、高齢化という避けて通れない時代的背景がございます。その中での今後の10年間を見据えていかなければならないという中で、本県の経済を発展させていくためにはやはり、他のところにはできないような技術力の高いものづくり産業の集積という優位性を生かして、今は知事さんが積極的に頑張っていらっしゃる炭素繊維分野、次世代を担う産業の育成に取り組む形でやっていらっしゃるわけですが、炭素繊維以外に何かもう一つか二つぐらい欲張ってもいいぐらいの、先ほどおっしゃっておられた澁谷委員のところにもありそうでもございますし、そういうものを追加して挙げただけであればありがたいと思いつながりながら聞いていました。

それだけ石川県の産業競争力を高めるといふことになれば、炭素繊維はもちろんですが、ニッチトップ企業が石川県の場合は非常に特徴的な状況で、ものづくりの支えになっているところでもあります。その中小企業の集積というものの自体が石川県の特徴であり、強みであると考えていますので、そういう部分をより強調していただきたいなど。

一方では、食文化や伝統工芸などの歴史的なもの、他にないような光り輝く伝統工芸などを地域資源として生かしながら、新製品の開発、販路開拓を進めていただくことが必要ではないかと。先ほど小田さんがおっしゃった観光資源にも、こういったものがつながっていくのではないかと思います。こういうことが結果的に国内・国外からの誘客の促進につながるのではないかと思います。

新幹線が昨年開業し、翌年のスタートの段階で長期構想が出来上がるのは、石川県にとってタイミングのいい状況だろうと、私は個人的に考えているところでもあります。いわゆるものづくりの特徴あるそして他にはないようなものを産業界のご努力を頂きながら、またニッチトップ企業の数を増やし、そういうものを石川県の特徴的なものとして頑張っていきたいと心から思っています。

それから、こういったものが出来上がるためには、産業人材の育成というのが絶対的

な必要条件です。これは、教育の問題もありますし、企業が存続していく上で最重要の課題だろうと思いますので、労働力が減少している中で本県出身の学生の U ターンは、努力すればまだまだできそうな部分があるかと思いますが、大学等の高等教育機関が集積する本県の優位性というものを生かす部分がまだあるのではないかと、個人的には思っているところです。また、県外出身の学生も、新幹線が通って金沢や石川県の見方が変わってきているように感じますので、期待感を持ちながら、県外出身の学生、県内で学ぶ学生が石川県で定着していただく努力を官民合わせて頑張っていきたいと思っています。

今回の最終とりまとめ案は膨大なものですが、これからの 10 年の石川県の盛衰をそのまま象徴するような内容であり、この方向性がしっかり盛り込まれていると思っています。今後は産学官が一致協力して確実に実現していくことが非常に大事だと、このように思いながらお話しさせていただきました。